

2025年5月4日

(朝 10:30-11:30)

## 世界宣教の開始

聖日礼拝		司会 城尾公彦
前奏	全員黙祷 「新聖歌23番」	ヒムプレヤー
招詞	イザヤ書63章7~8節(旧1036頁)	司会者
頌栄	「新聖歌60番」	ヒムプレヤー
主の祈り	(プログラムに印刷)	全員
使徒信条	(プログラムに印刷)	全員
交誦文	新改訳12番 詩篇34篇888頁	司会者・全員
聖書	使徒行伝13章2~3節(新202頁)	司会者
讃美歌	新聖歌182 ただ信ぜよ	ヒムプレヤー
祈祷	司会者による祈り	
	子供達の祝福の為の賛美484番	ヒムプレヤー
讃美歌	新聖歌209 慈しみ深き	ヒムプレヤー
メッセージ	「世界宣教の開始」	城尾マコト牧師
讃美歌	新聖歌136 御靈よ降りて 証とお知らせの時間	ヒムプレヤー
献金	新聖歌55番	
頌栄	新聖歌63番	
祝祷		城尾マコト牧師
後奏	全員黙祷 新聖歌59番	



Youtube



Facebook



HomePage

使徒行伝は13章から、大きな転換点を迎えます。これまでの舞台だったエルサレムを離れ、福音が「地の果てにまで」広がっていく新たな段階—世界宣教がここから本格的に始まるのです。そして、その出発点となったのが異邦人地域にあるアンテオケ教会でした。

この教会は、多様性と一致を兼ね備えた、非常に靈的に成熟した群れでした。預言者や教師といった靈的な指導者が与えられ、日々主を礼拝し、断食し、熱心に祈る共同体でした。そこに集っていたのは、資産家のバルナバ、アフリカ出身のシメオン、北アフリカ・クレネのルキオ、ヘロデ王と育てられたマナエン、そしてかつて教会を迫害していたサウロ(パウロ)と、実に多彩な顔ぶれでした。彼らは出自も国籍も異なる中で、主にあって愛と一致を保ち、真理に仕えていました。

ある日、彼らが断食と祈りをもって主に仕えていたとき、聖靈が語されました。「さあ、わたしのためにバルナバとサウロを聖別し、わたしが召した働きに就かせなさい」と。その召命に対し、教会はさらに断食し、祈り、二人の上に手を置いて、喜んで送り出しました。最良の人材を手放すことを惜しまず、福音のために捧げたアンテオケ教会の姿勢は、今日の私たちにも大きな模範を与えてくれます。

すでに、サウロは回心してから十年以上、タルソやアンテオケでの準備期間を経ており、バルナバもまた整えられた人物でした。二人は聖靈に導かれ、セルキヤへ下り、船でクプロ島へと渡って行きます。最初に訪れたのはサラミス。そこではユダヤ人の会堂で神の言葉を語り始めました。同行していたのは、マルコと呼ばれるヨハネでした。彼はこの後、旅の途中で二人と別れエルサレムへ帰ってしまいます。彼の心に何があったのか、聖書は多くを語りませんが、若さゆえの葛藤や不安があったのかもしれません。

彼らは島全体を巡り、やがてパポスという町に至ります。そこにはセルギオ・パウロという地方総督がいました。聰明な人物で、バルナバとサウロを招き、神の言葉を熱心に聞こうとします。しかし、そこには「まじゅつ師」エルマ、別名バル・イエスという偽予言者がいて、総督の心を惑わせ、伝道の妨げとなっていました。

そこでパウロは、聖靈に満たされ、厳しく彼を戒めます。「あらゆる偽りと邪悪に満ちた悪魔の子よ。主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか!」と。そして神の力により、エルマは一時的に盲目となり、手を引いてくれる人を探し回ることになります。

この出来事を目の当たりにした総督セルギオ・パウロは、主の教えに驚き、信じる者となりました。こうして、アンテオケ教会から祈りと献身をもって遣わされた福音の働きは、確かに地の果てへと歩み出していったのです。

城尾マコト牧師